

保育における人間関係の展開 II

——展開過程の条件——

佐々加代子 梅田裕子* 中村晃子**

序

ここ数年、環境破壊の宇宙規模での拡がり指摘されている。自然界に生きるものにとって、「環境問題」への解決策を求め、今を生きる生物たちと、将来の宇宙に住む生物のために残していく環境づくりの為に、多くの国々が、主義や主張を越えて論議を重ねる場をもつようになった。環境破壊を予測だにしないで「すすめる」方向をとってきた日本においては、経済の進展をもたらしたが、その歪みがさまざまな面ででてきているとらえている。

保育に関する社会情勢は、男女雇用機会均等法の実施や、流通業界に代表される24時間営業や夜7時までの営業に伴うパート労働者増などが、産休明け保育などの需要を高め、長時間、二重三重保育をもたらしている。保育に欠ける内容が従来と様変わりしてきている、とも言えるであろう。この現代社会の保育が抱える問題は、子どもたちを脅やかし⁴⁶⁾、子どもたち自身の問題行動¹⁸⁾等を生み出してきている。

一方、乳幼児の発達研究⁵⁾¹²⁾²⁶⁾は、周産期医学から乳幼児期^{14~15)}に至るまで、母子関係の充実が述べられて久しい。胎児期からの成長ぶり⁴⁾が明らかにされるにつれて、胎児を宿す母親に要求される内容はさらに高まってきている。また、障害児に関して、ダウン症³⁷⁾などに代表される早期教育は、家庭での療育⁷⁾²³⁾から、という指摘も多い。生物学的な「母親」に集中して求めていく社会情勢であるということは、とりわけ働く母親たちにとっては厳しい状況と言えよう。

ところで、かつて日本の女性はそのライフサイクルにおいて、結婚・出産・育児は重要な位置を占めていた。日本古来の文化とともにあって「日本の母の姿」²¹⁾を生み出していた。しかし近年、人生80年の声を聞いて以来、さまざまな女性の姿に自分のライフサイクルを重ねてみようとする女性が増えてきた。出産する子ども数の減少とも連動し、「女性の生き方」が改めて模索され始めている。また、育児ノイローゼ¹³⁾の増加、乳幼児虐待⁴⁶⁾も、単に子どもとのかかわり方の問題だけでは論じきれない。子どもの成長過程にかかわる大人たちの意識の変化、及びそれ故に起こる具体的な方法の選択によって、子どもたちは、日常の生活の「場」においても、「保育に欠ける」状況の中で存在する、ということになる。

子どもたちの成長過程において、発達助成者としての役割を担い、その機能を果たすこ

* 墨田区中川保育園

** 敬愛みどり保育園

とが求められている大人たちは、それぞれの立場において「問題」の解決策を模索しながらすすめていかなくてはならない。

保育を職業とする保育者たちにも求められるものは多い。社会の変化の波の流れに棹をさしても、その流れの速さを止めることは無理かもしれない。しかし、保育の現場で、希薄化した人間関係の育ちの中から見出せる子どもの姿^{30)34)43)~45)47)}を見出したとき、コミュニケーション関係の展開過程からみつめ直す必要性を感じた。保育者は、子どもと或いはその保護者たちとかかわりあう場面がもてるという強みもある。その「場面」を人間関係の展開の起点として検討していくことにある。

筆者らはI報³⁴⁾において、人間関係の成立と展開における、子どもとのかかわり方の基礎理論とそれに基づく0歳児の実践研究について論じたが、人間関係の展開過程についての検討が残っていた。ここでは、発達助成者としての大人の役割に焦点を当てながら、人間関係の展開過程における条件について論じる。

1. コミュニケーションの基本的過程

コミュニケーションの代表的なものに「ことば」がある。ことばによるやりとりは、よく「キャッチボール」にたとえられている。コミュニケーション過程を明らかにするためにも、その内容をみてみよう。

1. キャッチボール開始前

- 1) キャッチボールをする両者の間で、「キャッチボールをする」ということの合意がある。
- 2) 両者の間でボールを投げるのに「良い」距離を定めてその位置につく。確認する。
- 3) 両者は向き合い、ちょうど対面形となる。
- 4) 役割を決める。

2. キャッチボールの開始

- 1) やり始めの合図をする。
例：片手を挙げる、「さあ、いくぞー。」
- 2) 両者それぞれ態勢をつくる。ピッチャーはボールを持って足場を固める。キャッチャーはしゃがんでピッチャーの位置の確認と、ボールを受けるさまを想定して態勢を整える。

3. ボールのやりとり

- 1) ピッチャーはふりかぶり、ボールをキャッチャーに向かって投げる。キャッチャーはピッチャーのふりかぶりとはほぼ同時に両手で構える。
- 2) ボールが飛ぶ。
- 3) キャッチャーはボールを両手で受けとめる。「ナイスボール」と言う。または、その球筋の評価を表情等で示す。ピッチャーは投球フォームをたて直しながらキャッチャーを見る。キャッチャーの評価(表情等)を受けとめる。
- 4) キャッチャーはボールを片手に取ってピッチャーに向かって投げる。ピッチャーはキャッチャーからの返球の構えを見て両手でボールを受けとる態勢にしている。
- 5) ボールが飛ぶ。

6) ピッチャーはボールを受けとる。

2, 3の過程をくり返す。両者にキャッチボールは楽しい、してよかったという思いがもたらされる。

上記の下線の部分は視覚的にとらえ得るものを示している。とりわけ、ボールは実際の「物」だけにとびかうさまはとらえやすい。スピードや方向も、一応受け手にとって判断できるものである。

しかし、実際のコミュニケーション過程はこのように簡単に示せるものではない。ボールはことばにたとえられても、ことばは見えるものではない、からである。しかも、1.の過程をふまないのがふつうである。即ち、人に向かって話したいという必要性を感じた時が始まりであり、その時、既にピッチャーになっており、相手の都合を伺ってから始めるものではないからである。話された側は、その時自分がキャッチャーの役割を付与されているという認識がない場合もあり得るのである。

話しことばは見える物体ではない。ボールのように体感しにくい。「確かに相手が受けとった」かどうか、また、その内容がどのように受けとめられたのか、ということの判断はむづかしいものである。話し方の速度や強さによっても受け手が下す全体の評価は受け手の感覚にゆだねられることが多いだけに、なおさらである。話しことばというものは、話し手がその人自身の考え等を具体的に表現するものである。内容が伝わるように組み立てられるのが一般である。連続的に産生される。話しことばの産生は、いわば蚕の糸の放出と同様に考えてもよいであろう。その内容をくみとる時には、繭全体をとらえた上で、糸をたぐり寄せながら、その中味を解釈していく、ということになる。しかも、ことばの産生時の声の抑揚、間などのいわゆる準言語や表情等からもくみとって解釈するのである。その中の「何か」とらわれてしまうと内容の解釈につながらないの言うまでもない。

キャッチボールの比喻だけでコミュニケーションの機能やしくみがわからないのはむしろ当然であろう。しかし「やりとり」が展開、発展していくメカニズムというものは、このキャッチボールの中に見出せる。一つは両者がその役割を交換 (turn taking) していること、二つめはその姿勢にある。つまり、両者がきちんと向かい合い、そのボールを真剣に交換し合っていることと、どのようなボールであっても結果的には、そのボールの投げ方よりは、投げて受けとる行為そのものを楽しんでいることと、ボールが変化することは、むしろ、そのやりとりがよりおもしろくなることだということがわかっている、ということにある。そして、三つめには、キャッチボールのあとに「やってよかった」という良い気分が残ることにある。両者にとって、その「遊び」がうまくいくほどに、その「相手」と「遊び」たくなるものであり、その「遊び」時間 (量) が多い程、その「相手」との間柄は進展する、ということになる。変化に富んだボールのやりとりもできるようになる、ということである。その上、コントロールミスで受けた場合には、かえって相手の状態をおもんばかるようになる。従って、ことばを含めたコミュニケーション (人間関係) もこのような間柄になることが両者の間柄の成立・展開において重要である、ということになる。

再びキャッチボールで考えてみよう。

両者の機能がほぼ同等の場合でもボールは投げ手が意図したようには飛ばないことがあ

る。受け手はどのようなボールがきても受け取りそこねないこと、また投げ手もどのような変化球でも相手が受けとりやすいようにコントロールすることが“よい”ボールのやりとりになる。名ピッチャー、名キャッチャーの存在はキャッチボールの内容がよくなる（質が高い）ということになる。

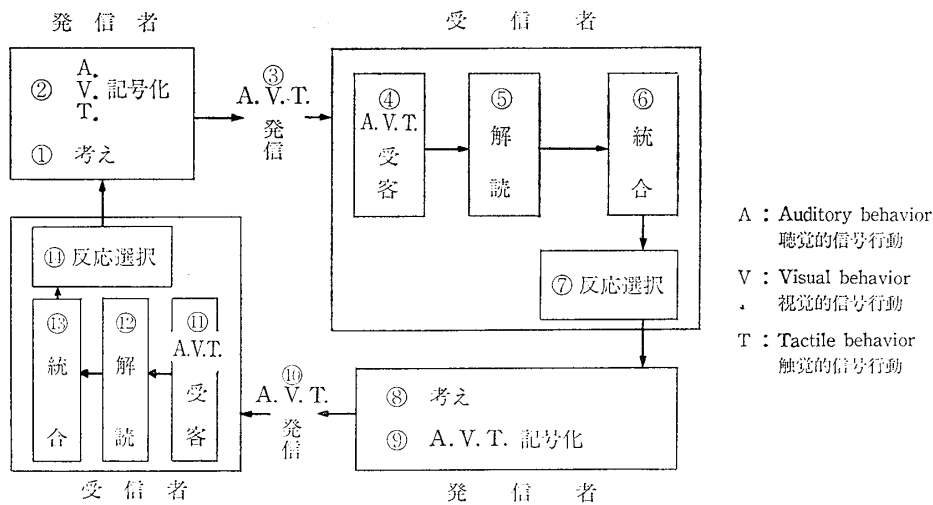
両者の技能に差がある場合には、名キャッチャーが必要である。その資格条件としては、相手の技量をしっかりとみきわめられる（評価）ことと、その上でピッチャーが投げた体験で良い結果が得られると思われる距離を定められるということである。遊びが始まった時には、どのようなボールが投げられても、いつでも「ナイスボール」と返答できることと、その上、ほんの少しでも、今の球筋についての助言がつけ加えられることである。この対応は、ピッチャーに今の投球内容を想起させることと、修正点の助言を得たことで、次の投球内容（行動）の変容を促すことと関与するからである。またそうなるような「表現」をしていくことにある。このくり返しの体験は、コントロールの良い、良いピッチャーを育てる基盤を形成する。名キャッチャーに出会えることは名ピッチャーを育むことになる。

キャッチボールは「投げて、受けて」楽しさにある。キャッチボールにおいて受けることを体験するには名ピッチャーが必要である。その資格条件は名キャッチャーの資格条件と同様である。キャッチボールは「受けること」が楽しくなるように、「ボール遊び」として位置づける。ボールの「質」を、硬球ではなく、やわらかい、大きな、カラフルな、材質に変えてみることであろう。キャッチャーとして初めて「受ける」場面では、ごく短い距離とし、声をかけながらゆっくりと近寄って行って、ちょうど両手をさし出しているところにボールを降ろすこと、或いは座っている受け手の足元にコロコロとボールを転がして届くようにすること、などがある。「遊び」として楽しくなるような工夫をこらすことであらう。ここでも、くり返しの体験は、距離を長くさせていくことになる。名ピッチャーに出会えることは名キャッチャーを育むことになる。

両者の間柄に信頼関係が育まれるのは言うまでもない。名ピッチャー、名キャッチャーの存在は、乳児期の母子関係に代表される人間関係の展開過程にみる、「人」の役割とその機能を示している。

日常のコミュニケーション過程（人間関係）は基本的にはこのキャッチボールに代表されるように、一対一の個人間コミュニケーションである。一対一の間柄は、一回路ということの基本として、自分が関係する人間関係の間柄がどれだけの回路があるのかということを考えてみる。その一人ひとりとの間柄をおさえずに、複数の人たちとの関係把握はできない。社会生活を営んでいる以上、さまざまな人々との間でコミュニケーション関係がきり結ばれる。その組み合わせによって変化してくる人間関係の様相はさらに複雑になる。瞬時に変化していく状況の中での人間関係を把握しながら即応していく為にも、コミュニケーションの基本的過程をおさえなくてはならない。図Ⅰに示した。高次元の言語能力（成人言語）を持っている人との間柄として記述している。

両者の間柄が展開するには、連続的な交信過程が行なわれることにある。媒介となるのは三種類の信号行動系（佐々³⁴⁾、I報、図Ⅱ、p. 30）である。交信過程は相互に担い、変動的なものである。発信者、受信者のいずれの場合でも、相手の人の思考活動の過程は見えない。思考活動は頭の中の、高次元の言語の活動そのものである。発信時には、考え



図I コミュニケーションの基本的過程 (佐々, 1989)³⁵⁾

①, 信号行動を記号化すること②で発信③し, 受信時には, 信号行動系の受容(発信者の発信内容そのままをありのままに受けとめること)④, 解読(受容内容の意味を読みとること; 相手はどういうつもりでこの事柄をこのように表現したのだろうか。この表現はどのように解読してみると発信者の意図がくみとれるのだろうか)⑤, 統合(解読のあとの私自身の考えをまとめてみる, 判断)⑥, 反応選択(応答方法の選択, 表現方法の選択)⑦, の上で, 考えをさらに整理⑧して, 信号行動系の記号化過程⑨を経て, 発信する⑩, ということだめぐっていく。この⑩で役割が交替されて, 先程と同様の過程として信号行動系の受容⑪~反応選択⑭までを経ていく。

発信内容以外は, いずれも Black box 内のことであるが, 人とのやりとり(コミュニケーション, 人間関係)過程における, 思考過程のしくみを言語能力面からとらえて図示したものである。

保育活動を考えてみよう。発信者となる保育者は, 1. 受信者の受けとめる能力の評価(理解能力の評価)をした上で, 2. 状態をおさえる(とりわけ乳児の場合は states, 脚注 1⁴⁰⁾) こと, その上で 3. 発信内容を考え, 信号行動系の記号化を図り②, 発信する③。受容④~記号化⑨までの過程がまだ未熟であるととらえた上での発信とする。即ち, 発信内容はより具体的で, とらえ易いものとし, 一時に受けとる内容量が密になりすぎないように工夫をすることである。細やかなやりとり活動をするににある。発信過程を丁寧に行なうことになる。発信③の段階で感情のおもむくままであった場合には, 受信④の段階でその発信内容が受けとめられないばかりか, 解読⑤~記号化⑨までの思考過程を脅やか

注1) 状態1 (state 1): 閉眼し, 呼吸は規則的で運動はまったくみられない。静睡眠状態。
 状態2 (state 2): 閉眼し, 寝ている呼吸は不規則で, 大きい動きはみられないが, 手足や口の小さい動きはみられる。活動睡眠状態。
 状態3 (state 3): 眼を開いているが, 大きい運動はみられない。これには開眼してボンヤリしている状態と, はっきりおきている状態とがある。
 状態4 (state 4): 開眼し, 手足や身体を動かしている状態をいう。これははっきりした覚醒時である。
 状態5 (state 5): 開眼, 閉眼に拘らず, 泣いている状態をいう。
 状態6 (state 6): 状態1~5以外の状態をいう。痙攣, 昏睡など。

し、思考停止或いは回避までも起こしかねない。一方、保育者が子どもの発信内容①～③の受信者となる場合には、それがたとえどのような内容であってもしっかりと受容④し、その意味内容をとらえた⑤、⑥上で反応⑦～⑨することである。とりわけ、子どものA・V信号行動系の体系のもつ意味をくみとらなくてはならない。大人の成人言語とは違った言語体系；未言語（佐々，1986³²⁾）や幼児語等で表現されるからである。また、自分の発信内容が意図したことと違って受けとめられている、と感じた場合（受けとめた子どもからの、結果としての発信内容からの推察により）には、自らの発信内容全体を省みて、次の内容修正をすることである。子どもの側の理解力の乏しさという評価のみで終えることなく、理解しにくい内容を発信した自分の考えの「甘さ」についての指摘を受けた、その評価である、と受けとめることにある。その為にも、自らの発信内容をきちんとおさえられていることが求められる。即ち意識化して発信することにある。信号行動系は両者の関係の中で機能するのであり、それはほとんど「見えない」ところでその人自身に働きかけるからである。従って、「意識化」での発信・受信は、その見えない部分を推察することや修正にも関係する為、交信過程においては重要な条件となる。

思考過程のそれぞれの段階を経るには時間がかかるものである。瞬時に判断しても口ごもったりすることは表現しようと思うが余りに先を急いだ行動とも言えようし、考えた末の発信とも言えよう。また一方、発信内容を受けとめた時に、いったい何を言いたいのだろうか、これは考えた結果の表現なのだろうかと思えることもある。連続の交信過程の中で発信内容から推察する、その人自身の思考の流れは、時間との関係でおさえてみてもわかるものでもない。また時間を多く費したからと言って発信内容が質的に高まるとも言えない。要はその一つひとつの過程が十分に機能しているのかどうか、ということにある。十分に機能するには、言語学習の成長過程においてゆっくりと時間をかけてその段階を体験してきていることが必要であろう。その体験は瞬時の判断を要するコミュニケーション過程における即応能力と関連すると思われる。しかし、それが即、質の高い、応答性豊かな人であるとは限らない。その場の人間関係の「状況」において、「今」、相手の人から得た発信内容から考えて④～⑨の対応をすることにある。一方のみでつきすすむのではなく、あくまでも、相手の人との関係において過程を経る、ことにある。

Ⅱ. コミュニケーション過程における信号行動系の特徴

コミュニケーション過程において、関係の展開の様相を評価するのに重要な手がかりとなるのは信号行動系である。それぞれの特徴を関係の展開という視点でみてみよう。

1. 触覚的信号行動系 (Tactile behavior : T) について

相手の人との接触（たとえば皮膚と皮膚）によって感じられる信号行動系。両者が距離ゼロにおいて交信が可能。同時に見られる信号行動系は、視覚的信号行動系と聴覚的信号行動系。プロクセミックス（I報³⁴⁾、表I-1～2、p.31）による内容からみると、この交信時には皮膚と皮膚の接触の割合が高い程に温度感覚（ぬくもりなど）や嗅覚（母乳などの嗅いや体臭など）、味覚（母乳の味など）が感じられる。また痛覚（ほほを寄せた時に感じる男性のひげなど）もある。

一般には、両手や肩、背中などでふれあっている部分を通して伝わってくる相手の人の

様子が体（肌）で実感できるものを指す。交信過程において触覚的信号行動系が両者の人間関係の展開に有効に働く条件は、体を通して伝わってくる信号行動系が、自分にとって「嫌でない」こと、さらに「快く感じられること」にある。その状態を維持していることで互いがさらに「快く感じること」があれば、そのまま交信が続くことになる。乳児との間柄においては、抱いた時に腕に、体をまかせるような状態になること、とか、泣いている時（stase 5）に手を添えると泣きやむこと、などがT信号行動系の発信及び受信（下線）行動である。これは両者の交信が展開していることを示すものであり、とりわけ、かかわっている保育者との間柄が「促進する」³⁴⁾⁴⁷⁾⁴⁸⁾とみなせる信号行動系である。

このT信号行動系を発信するということは、相手の人（子ども）に直接接触するだけに発信方法によっては大変驚かせることになる。痴漢行為はその代表例である。一方、接触によって感じられる快い反応は、相手が親しみのある人であればある程嬉しくなるものである。男女の愛のコミュニケーション¹⁷⁾が、その典型である。しかし、距離ゼロ内における交信時に伴う、温度感覚、嗅覚、痛覚などから嫌悪感が生じた場合には、接触そのものを避けたりすることもでてくる。これらは人間関係上において、調節作用として働き、その感覚が許容度合を決める為に、組み合わせによっては二度と触れたくない、と結論づけられることもある。関係遮断・切断である。この交信は一方通行のみではなく、両者が、相手の感覚を受けとめながら、細やかで、隠やかな過程となれば、関係は継続する。相手の人との協応関係で成りたつものである。

このように、T信号行動系は感覚系に直結しているだけに、交信内容の結果の良否で関係の維持・継続と、遮断・切断という、二極分化の結論が導き出されるのはやむを得ないことでもある。

2. 視覚的信号行動系 (Visual behavior : V) について

表情等の、いわゆる非言語行動。同時にみられる信号行動系は聴覚的信号行動系。相手の人の表情、体で表現されることば、ゼスチュアなどを総体として受けとめて、その意味内容をくみとっていくもの、である。細やかな顔の表情等を知覚・認識した上での交信である。受けとめやすい距離の限界は、2 m程度である。瀬谷³⁸⁾によると、顔面表情については「あまり国や文化による差はない。それが生来的 (innate) なものであると言える」という。しかしその内実を読みとろうとする場合、人間行動学の、個人間コミュニケーションにおいて現象として信号価をもつという、非言語行動の内容を正確に把握して解読していくことになる。口の部分の単位¹⁰⁾としてだけでも9種類に分類されている。

- 1) 単純微笑 simple smile——唇は結ばれているがぎゅっとではなく、口角は上や外へ引かれていない。この単位は、グラント(1969)による単純微笑と広い微笑 wide smile の両方を含む。
- 2) 上歯がのぞく微笑 upper smile——口角は上と外へ引かれているが、とがったままである。唇は離れて上の歯をいくらか露出しているが、下の歯は出していない。
- 3) 口を広く開ける微笑 broad smile——上歯がのぞく微笑と同様だが、下唇が下げられて下の歯をいくらか露出させている。笑い声の発声は、しばしばこの微笑と関連しているが、ほとんどの他の形式の微笑にも起こりうる。
- 4) 両唇を押しつけた微笑 compressed smile——単純微笑と同じだが、唇はぎゅっと引きしめられていて、かすかに口の中に入れられる傾向がある。
- 5) ゆがんだ微笑 wry smile——非対称的な微笑で、唇は閉じたままである。顔の片側では口角を下で見られる形がとられ、もう片側では苦笑い grin や単純微笑で見られる形がとられる。
- 6) 楕円形の微笑 oblong smile——下あごは押し出され、そのため上下の門歯は相対して、た

いては接している。上下の歯は露出されて口角は上と外へ引かれ、とがらずに丸くなる傾向がある。

- 7) 唇を中へ入れる微笑 lip-in smile——上歯がのぞく微笑と同様だが、下唇は歯の間に、かまわずに引き入れられている。
- 8) 遊び顔 play face——口は開いた口のように広く開けられ、口角は外方上へ動かされがちで、微笑に特有の尖った形を作り出している。歯はほとんどあるいは完全に唇によって隠されている。
- 9) 苦笑い grin——単純微笑と同じだが、口の片側だけしか使わない。

日本人の「笑い」について、異文化圏の人たちからは「わかりにくい」と言われている。笑いの表現のことばの内容を二辞典 (A¹⁾, B²⁾) から挙げてみた。

- にここに…… A. 温和な気持ちで楽しそうにうれしそうに笑うようす。 p.218
 B. うれしそうに笑うようす。 p.532
- に っ と…… A. 満足げに笑うようす。 p.219
 B. 声を出さずに笑うさま。 p.532
- にやにや…… A. 内心悦に入ったり、さまざまな思い入れがあったりして、笑いを思い浮かべるようす。 p.219
 B. 意味ありげに薄笑いを浮かべるさま。 p.532

内容に一貫性がない。そのように思えばその範疇に入るといふ曖昧さである。我が国における笑いについては、先の人間行動学が分類した上での単位リストではない、ということもあろう。しかしこれでは異文化の人たちへの手がかりにはならない。表現ことばには、この他にも、にたにた、にんまり、にっこり、ケタケタ、ほくそ笑む、ほほえむ、ふふふと笑う、などがある。内容は微妙に違っているということがわかるには我が国の文化とのなじみがよい程判断できるものであろう。しかし、このことばから逆に表情等の表記を、と言われてもなかなか表現できないものである。従って、これらの「ことば」が用いられた、その時の表情、及び、その表情だと受けとめた「状況」の推察はむづかしい。


表情の意味は「知覚の対象が知覚の瞬間に心に開示する語りかけ」¹⁹⁾たものとして受けとめる為に、受信者の心が受信時に揺さぶられる。現象、即ち、発信者のあるがままの表情、及び発信者の意図ある表現としての表情、とのくい違いがかなり起こりうるということでもある。つまり、両者が知覚しうる距離間内に居るといふことは、V信号行動系を連続的に発信・受信するということになる為、交信過程の瞬間瞬間に感じたさまの発信はまた、瞬時に相手の心にも働きかけることになるからである。喜怒哀楽というように、その表情が比較的判別しやすいものでない場合には、とりわけ感じたままの、いわば「思いこみ」による判断によることが多い為、両者間のズレを大きくさせることになる。たとえば、やや緊張した時の表情の一つに、現象的には“笑い”のように見えるものがある。相手が“笑い”と受けとめた反応として「何笑っているんですか。不謹慎な」と言われた場合、発信者は混乱し、追いこまれる。自分自身の思いとはかけ離れた「表情」が相手にそのように「見えてしまっている」ことと、何故そのような顔つきになってしまっているのだろうかということがわからない為である。この「ズレ」は人間関係上の問題となる。

身ぶり (ゼスチュア) についても考えてみよう。Saitz²⁴⁾ らは「どの国にも共通のものがある」点を指摘しているが、これも文化の影響を受けるのは否めない。記号化されてサインランゲージとしての意味構造をもつものもある。Argyle²⁵⁾による挨拶の例 (図Ⅱ)³⁸⁾で



図II 挨拶のいろいろ (Argyle, 1975²⁾)⁸³⁾

みると、お国ぶりで変化している。そのサインを解読した上で対応しないとその場面が生きてこない。その記号化されたものにとらわれてその意味がわからなければ、その場における人間関係は、その信号行動系がきっかけで、両者の間柄の展開過程が停止或いは切断される。

(例) 発信者	受信者	人間関係の展開
	1) 反応がない	切断
	2) え? (横俵)	一時停止~返送の発信
	3) 丸って何だ?	問いかけにより返送の発信
	4) うん。OK (同様のサイン)	展開

3. 聴覚的信号行動系 (Auditory behavior : A) について

泣き声、音声、ことばである。マイクを使用すると10m以遠にも届く。肉声では7m前後。

1) 泣き声

乳児の泣いているさまは state 5. (p.51) である。state 4. 敏括さ⁶⁾ (alert) にあるときが一番吸収しやすい状態であるという。state 5. は、生理的に動機づけられた、乳児からの緊急発信である、と言えよう。保育者は受信するだけでなく、誘導されて (V)、乳児と対面した (V) 上で、state 4. に転化するようにかかわること (T.V.A 発信) になる。泣いていることを、「不快」な信号と意味づけしてそれが静まることや、おさまるように対応することにある (I 報の場面 I. II, pp.28~29)。不快な要因をとり除く、い

わば「作業」となる。状態の転化が起こったときの発信内容が最も乳児の側に吸収されやすい。しかもその対応が的確で、す早くしてくれる人は知覚・認識されやすく、その人との間柄が深まることになる。

幼児の場合の泣くことも、乳児の場合とほぼ同様の機能をもつものと考えられる。言語表現能力が多少あるとしても、泣くということは、さまざまな事柄がからみ合い、表現しきれない部分が感情を伴って産生されている、と解釈してもよいであろう。意味としてはやはり、不快及び、悲しみの信号発信ということになる。 「本人自身が感じた」不快及び悲しみである、ということ忘れてはならない。この心情が受容されない場合には、間柄は停止か切断となる。「わかってもらえない」という思いが残る為、発信者にはならない、ということである。「泣いてばかりいてはわからない」ということばの反応は「泣く」という意味を解読しようとしていない人物であるということ子どもに知らせる内容である。いわゆることばでの表現ができない「状態」に陥っていて、そのようにしかならない子どもの精一杯の今の表現である、ということを受けとめ④、その心情をくみとろうとすること⑤で、間柄は展開する。

2) 音 声

それぞれの国の言語には、その国のことばの音韻体系がある。現在の日本の体系にみる語音は表 I ④⑤である。

乳児期にあっては、成人言語の音韻体系に近いものが産生されてくるものの、その音を目的的に産生しようとしているわけではない。未言語である。従って、音韻体系も独特のものであるが故に、成人言語との比較においてその意味を解読することは不可能である。独特の文化に在る子どもの表現としておさえることであり、他の信号行動系との総体とし

表 I 国語標準音表記法 (田口, 1966)④⑤

		両唇音	歯 音	歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音	補 助 符 号		
子	破裂音	無声	p		t		k	長 音 符	全長 : 半長 .	
		有声	b		d		g			
	通鼻音	無声							変母音符	...
		有声	m		n ɲ		ŋ ɳ		口蓋化符	^ 又は ^
	摩擦音	無声	f	s	ʃ	ç		h	無声化符	。
		有声	w	z	ʒ	j				
音	破裂音	無声		ts	tʃ			有声化符	∨	
		有声		dz	dʒ					
	弾音	無声						鼻音化符	~	
		有声			ɾ				休 息 符	全体 半体
母音	小開き母音				i	u		アクセント符	半 -	
	半開き母音				e	o				
	大開き母音				a	a		調子符	平- 降↘ 昇↗ 降昇↘	

表II 90%以上正しく構音される時期(飯高他, 1987)⁹⁾

年 齢	高 木 ら		野 田 ら		中 西 ら	
	名	音	名	音	名	音
3 : 0 ~ 3 : 5	10名	w, j, m, p, t, d, g, tʃ, dʒ	50名	j, b, m, t, tʃ		
3 : 6 ~ 3 : 11	16	f, n	50	p, k, g, ʒ		
4 : 0 ~ 4 : 5	22	ç, h, k	50	h, ç, n, t	230	w, j, h, ç, p, b, m, t, d, n, k, g, tʃ, dʒ
4 : 6 ~ 4 : 11	28		50	w, d	303	ʃ
5 : 0 ~ 5 : 5	21	d	48	s	281	s, ts
5 : 6 ~ 5 : 11	16	dz	50	ʃ, ts, z	270	dz, t
6 : 0 ~ 6 : 5	20		50		380	
6 : 6 ~ 6 : 11			30		225	
備 考	s, ʃ, ts, tは6歳半までは90%以上, 正とならない。		3...dʒ, z...dʒは区別せず ʒ, zとしている。		単語で検査を目的とした音の初発反応による。	

注) 中西靖子他, 1972の資料をもとに作成した。

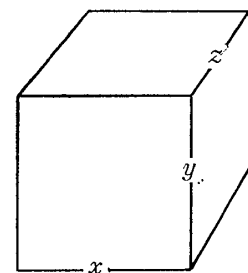
ての未言語として解読していくことにある。

有意味語以降の構音の発達には、表II⁹⁾に示すような経過をたどる。音声器官の未熟さからくる構音及びことばの産生は、幼児音、幼児語を伴ってくる為に、会話明瞭度は低くなる。発話量が多い程、その内容はわかりにくい。このことは、いわゆる構音障害⁹⁾⁴⁰⁾の問題と同様である。話す内容そのものより、話し方そのものに注意が奪われるということは、成人言語の母国語の音韻体系にはめこんでその意味内容を判断しようとする、いわば「癖」というものが我々の側に身についているためであろう。その音声の組み合わせそのものに耳を奪われると、内容の受信④さえ不可能になる。音声の連なりを受けとめられなかった受信者は、結果として「何を言っているのかわからない」と自らの思考能力で推察することなく、④~⑨を経て発信者につき返す反応発信をすることになる。発(構)音の問題は、本人が自助努力をしてもなお、発声発語器官の問題があつて、産出音が変わらない、ということもある。話し方の側面のみが問題となり両者の間柄が遠のくことになる。このことは、本人自身に、コミュニケーション場面での構えをつくることと連なっていく。その上、受信者側の反応によってコミュニケーション関係が停止或いは切断する。

このことについての見方については、Johansonの問題の箱の概念¹¹⁾(図III)が示唆に富んでいる。図に示すように、問題は、視覚しうるような三つの構成要素があり、聞き手(y)の反応によって、本人自身の感じ方(z)がつくられ、それぞれ現象(x)との関連でその問題の箱の体積が変化するというものである。

3) ことば

話しことばは談話に代表される。発話は、語、句、節、文、段落、談話となる。発話内容は、その場面状況において、対象者や話題との関連で組み立てられる。成瀬¹⁹⁾によると、「分かりやすい」かどうかは、発話の「要素の選択・連結・構成・配列・種類・長さ・区切り方・論理性などが複雑にからみあった結果である」という。聞き手はコミュニケーション状況の中で、話される内容ごとに要約しながら意味の解読をして応答していかなくてはならない。発話時は、聞き手のことをとらえながら「分かりやすい」条件でことばを産生することになる。ひとつの用語などの意味がわか



x=話しことばの特徴
y=聞き手の反応
z=話し手の反応

図III ことばの問題の図式 (Johanson)¹¹⁾

らなくなると、その次のことば、或いは発話内容全体がわからなくなってくる。成瀬は、また、通じるための条件を4つにまとめている。即ち、①言語表現の意味が人間の言動とその目的についての常識の枠のなかで解釈できること、②言語や符号が受信者のあいだの関心の焦点と関連づけて解釈できること、③言葉による表現の真意が人間の本性を配慮することによって解釈できること、④文化的意味がその社会の成員の習慣的・無意識的な行動と反応から解釈できること、である。そして「言葉と心を通じあう所には『脈』がある。言葉として表現されているがために通じあう領域を言葉の文脈 (verbal context) と呼び、言葉として表現されていないが通じあう領域を心の文 (気) 脈 (mental context)」とした上で、「真に通じる世界を実現するには、文脈とともに気脈の共有をも不可欠の条件に加えなければならない」と述べている。

コミュニケーション過程に照らし合わせながら考えてみると、発信過程の結果として気

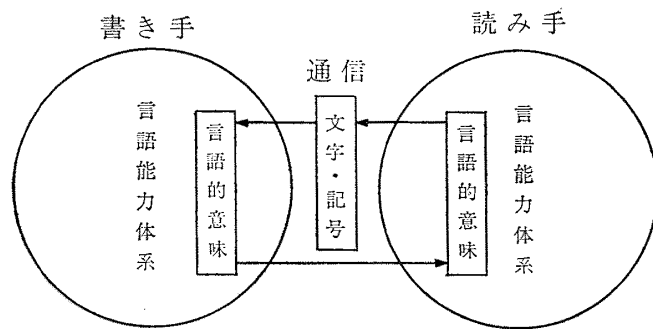
脈が共有できる間柄になった場合には、その人の文脈さえも解読作業がすすむ、ということになると思われる。これがいわゆる「あ・うんの呼吸」であろう。

発信者が幼い程、ことばの産生にみる内容は、その文脈及び、先でいう通じる条件や、意味論的環境などから推察しなくてはならない。留意すべき点は音声で述べた内容とほぼ同様である。従って、どもるといふ問題についての見方も同様となる。

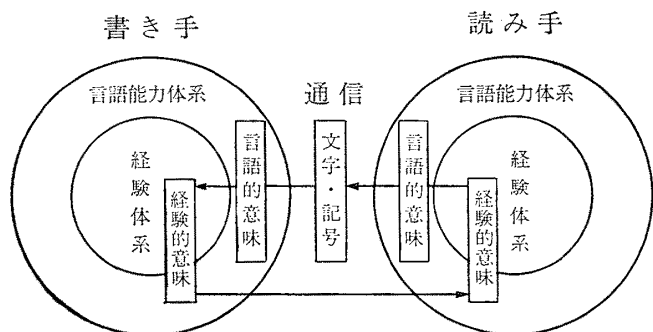
4. 総体としての信号行動系について

コミュニケーション過程における発信内容は、距離との関係にもよるが、単に独立して発信されるものではない。とりわけ2m以内であれば、V:A信号行動系の情報が多く入手できる。その内容を総体として受けとめて、「通じる世界」をつくりあげていくことになる。

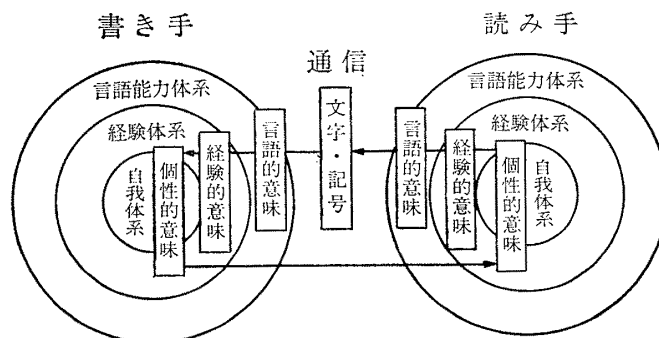
坂本の読みの構造²⁵⁾ (図IV)の段階は、①基本的読みの構造 図IV-1: 言語能力体系を接点として読んでいく場合には、この文字・記号等の意味を、能うかぎり精確



1: 基本的読みの構造



2: 第二次読みの構造



3: 第三次読みの構造

図IV 読みの構造 (坂本, 1980)²⁵⁾

に、それを書いた者の意中にある通りに理解していく、②第二次読みの構造 図Ⅳ-2：知的経験体系を意味する受容行動、③第三次読みの構造 図Ⅳ-3：自我体系を接点とする読みであり、個性的意味の受容行動、である。第一段階は、コミュニケーション過程における初めての出会いの④受容以降を、第二段階は、やりとり過程によって相互にわかりあった体験からの受容以降であり、第三段階は、相互間にいわゆる絆が確立したときの受容以降のあり方を示していると言えよう。相手の発信内容からの受信経験が積み重なる程に、読みの構造が質的に転換してくる、ということである。対象者の言語能力体系が未熟な場合には、自らの経験的な押しつけをしないで第一の段階をふむことが大切である、ということも示唆していると言えよう。

信号行動系を総体として受けとめるだけに、難しいことであるが、あくまでも、相互に関係しあっていく過程で育むものである、ということを忘れてはならない。両者の発信内容が「精確」に受信されていくためには、両者が向き合い、向かい合っていることにある。

Ⅲ. 人間関係の過程における向くということと向かうということ

1. 向くということ

コミュニケーション過程は発信者と受信者の間に交信の意味の矢印、 \longrightarrow と \longleftarrow を用いる。矢印はその人に向いていること、及び向かうという記号であり、方向を示している。コミュニケーション過程を \longrightarrow と \longleftarrow で記述できるということは、発信者としては確かに受信者に向けて信号行動系を発信したということであり(⑤~⑨)、さらに発信するということは、受信者が発信者となり役割交替した(⑩)ことを示すものである。

発達初期においては、乳児の発信は偶発的発信²⁹⁾である。受信者である母親が受容するということで、母親に、向かう矢印…… \longrightarrow 記号を用いる。乳児からのこの、無限大可能性の発信は、受けとめて対応してもらわなければ生存し続けることも脅かされるという存在者からの意味ある発信であり、母親に代表される保育者が受けとめて子どもに向かうことと対応することで、初めて機能することになる。受けとめてもらえたということが母親らの対応によって子どもに受けとめられる。これはコミュニケーション関係の成りたちの原始型である。受け手が居なければ、機能しない為、発信そのものもその後なくなる。発信者が乳児であることに意味がある。生存の為の真剣な投球だからである。その受け手になってこそ、「ヒット」としての第一歩が始まるともいえよう。このやりとりが返球の方向を定めていくことになる。その「人」に向くということと向かう \longrightarrow ということの学習となる。

母乳を飲んでいる時に抱かれているさまは、乳児と母親との向きの典型である。子どもの位置から見える母親の顔は斜め前方にある。state 4. の時であれば母親の変化の様子をながめることも可能である。母親が子どもの顔を見る時には首をまわし斜め上からとなる。母親の両手にしっかりと抱かれ(T)、母親の顔が目の前方20cmにあり(V)、声も聞こえる(A)、子どもにとってはこの上ない嬉しい時間である。首のコントロールが可能になる3か月頃には、T・V・A信号行動系発信で母親を誘導する。オッパイを飲むテンポがゆっくりとなり止まる(T)、じっと母親の方向を見る(V)、唇からオッパイをはず

し(T), 声を出す(A)。母親は吸飲のスピードが変化したことを感じとり(T), 子どもの方向に向く(V)。みつめる(V)。声をかける(A)。乳児と母親の動きはほとんど間髪を入れずに発信される。キャッチボールで言うならば, 相互に合意のサインを確認しながらの「ナイスボール」体験である。信号行動系発信が母親の, 或いは子どもの向きを変えさせている。自分たちにとって, ちょうどいい対面形をとっている。オムツ替えの時などの生活面の介助を受ける時のように, 真正面から相手を知覚・認識する量の体験も, 「その人」との間における適性な方向, 距離の定め方を学ばせているように思われる。Tゾーンにおける発信がその学習には最も都合の良い「状況, 態勢」である。さらに月齢がすすむと, 子どもがあお向けになっている時, 母親が横から「～ちゃん」と声をかける(A)と, その声のした方向をさぐりあて(V), 首をまわして(V)母親の顔と対面形になるようにする。これは, 子どもが両者の発信の位置関係について, 調整作用を身につけた, ということになる。発信の基本原型の理解(やりとり行動の \rightarrow と \leftarrow)は良い母子関係の成立段階を経ていると, 通常2～3か月頃に可能となる, ということが, これらの事柄からもうなづけよう。母子関係を育む場合の eye-to-eye-contact⁸⁾¹²⁾の重要性の指摘の根拠は, ここにあると思われるが, 子ども自らが「向けようとする」ということでの contact でなければ力にはなり得ない。母子の間柄は安全に抱かれている(T)状態を快く感じながら, 母親のまなざし(V)や語りかけ(A)を受ける態勢にあるからこそ育まれるものである。とりまとめると, 子どもからの偶発的発信 $\cdots\rightarrow$ を受信する母親 \leftarrow , そのくり返しの発信体験が, 母親(の方向)に発信 \rightarrow 受信 \leftarrow 行動に, また, 母親からの発信 \rightarrow を受信 \leftarrow するということになる。この過程あつてのコミュニケーション関係の基本原型の理解 \leftrightarrow となる。

人間関係の発達遅滞児の事例について, 「向くこと」から考えてみよう。既に一人歩行が確立していることが多い。その行動特徴として, 目を合わせるとぼんやりとした目つきをしているとか, 両目を大きく見開いたままじっとしている, またはまなざしが合わないとか視線を避ける(gaze aversion)ということがある。先に述べたまなざしが合う, 合わせること eye-to-eye-contact が起こる条件とおおよそ逆である。キャッチボールでいうならば, ボールを投げて, ボールが見えていないようであるとか, つっ立っていてキャッチの構えをすることがない(前者), 何とかボールに当たるまいとして回避する工夫をこらしている(後者)ことになる。前者は, ボールが「ある」ことに気づいていないことや, ボールが飛んでくるものであり, 向かうものだから受け取らないと当たって痛むということの学習・理解ができていない状態であり, 後者は, キャッチボールのしくみは一応わかっているものの, そのゲームへは参加したくないという強い意志の表われと考えられる。前者と後者はその育ちぶりによりかなり違いがあるということになる。後者は, 自らが「合わせない」動きをしているだけに, 本人自身が変わることをしない限りは発信過程は成立しない。発信を受信するときに, いつも切断の方向をとり続けてきた, その人間関係上の「決断」は, 何とか相手からの信号行動系(とりわけV)を遮断或いは軽減しようとする子どもの向き(マイナス面)を示しているとも考えられる。遅滞児らが対面形を避ける距離はとりわけ2m～0m内である。相手からの信号量が増す位置関係にある。人間関係の間柄が育ちつつある同志においては信号量が増えることはさらなる展開へのきっかけにもなるが, 模索状態にある場合には自分にとっての適性な距離関係を保とうとして,

後退することや向きを変えることをする。後退できない場合には、目を伏せること、両手で目をおおうこと、片腕で目をおおうことや顔をそむけることになる。遅滞児らの接近過程において対面形はとらないで、うしろや横側からというのは、信号行動系の受信量が急に増えないようにするための調節をしているのであろう。

一方、人の話をよく聞きとめたいと思う時には、どの席に座っていても、その人の方向に向こうとする³⁰⁾。顔をあげて

向けること、人の動きと共に首の向きや体をほんの少しの位置関係も変えようとする。自分にとってどういう態勢ならよりきちんと受信できるのかということが無意識的にわかっている為の行為であろう。コミュニケーション場面において「向き」が変わることは、このような意味で重要である。

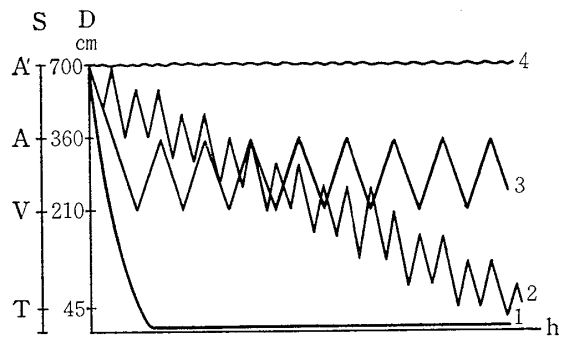
表Ⅲは遅滞児の事例の接近過程³³⁾を示している。向きが変わった段階が関係展開における一つの節目ととらえることができよう。接近過程の類型^{30)~31)}(図Ⅴ)の1. 遠方定置型にある中の節と言えよう。相手のボールを受けとる態勢、受信態勢を整えることができたことでボール遊びの出発点にたった、ということである。これはまた、相手にも、自分の向きと位置によって自分についての情報内容をわかりやすくさせた、ということである。

両者の位置関係、方向についても、距離——信号行動系と同様に、客観化が可能なだけに、関係の段階を評価する一指標としておきたい。

ところで、母親が子どもに向けて、自分の気持の赴くままに発信をくり返す、ということが続くと、子ども自身にさまざまな問題を残す²⁰⁾³⁹⁾という(表Ⅳ)。子ども自身の痛みそのものである。母親が交信過程の手がかりであるのに、名ピッチャー、名キャッチャーが「迷」になるとしたら、その迷いがそのまま子どもに影響する。子どもの問題はこれだけに留まらない。発信者をわずかながらでも知覚していると、声、顔、動きなど、その人自身の属性をその特徴としてつかむことになる。そして、その声(A)、姿(V)を感じた時に、回避態勢になる。即ち「向きを変える」とりわけ聴覚的信号行動系は、距離を越えて到達する為、早々に回避態勢をとることも可能である。距離関係が一定である場合には、我が心ここに、あらずとなる。受信者側で、ことばは音声に、或いはただの音から騒音にさえ転換させてしまう³⁰⁾。単なる音なら耳元でがなりたてられない限りは耐えられるわけである。このような相手方の内的変化は見えないが「向き」を見る手がかりとなる。顔は下向きでじっとしていると向くということがないからである。

2. 向かうということ

向かうということは接近することと接触すること(距離ゼロ、Tゾーン内に入る)でみることができる。乳児における「向かうこと」は抱きぐせや添い寝の習慣がつくこと、しがみつくこと、両手をさしのべること、あと追い、に代表される。母親との距離関係において、できるだけ接触していたいという、維持要求発信と言えよう。初期はTゾーンから



h : hour, D : Distance,
S : Signal behavior
1 : 密接型, 2 : 漸接型, 3 : 振幅型
4 : 遠方定置型

図Ⅴ 接近過程の類型(佐々, 1985)

表III Mちゃんとの接近過程とその特徴 (佐々 1986)³¹⁾

段階	Mちゃんとのかわり	時間的経過	子どもの目的	接近過程の型	人間関係の成立段階
1	その場にたちつく	初めでの出会い	I 観察型		
2	私から離れる、後向きの姿勢	初めでの訪問	"	遠方定置型	
3	私を遠くからみ始める、前向きの姿勢	2~3か月後	"	"	
4	少しずつ近づいてくる、私を観察する	1年半	IV 反復利用型	振幅型	I 模索期
5	近距離(1~2m)に居て、私を観察する、距離がちぢまる	2年目	V 接近検討型	"	
6	私を探索する	3年目	"	"	
7	私を十分に探索する	4年半め (→1か月半 (→1か月半 続く)	VI 探索型	"	II 接触体験期
8	私を受けとめる		VIII 接触型	密接型	III 共有体験期 IV 弁別不安期
9	私を自分に引き寄せる、体験を共有させる		X 共感型	"	V 安定期
10	私から他の人へのひろがり				

表Ⅳ 母親の態度とそれに関係して乳児にあらわれる精神発生的障害 (Spitz, 1965²⁰⁾)⁸⁹⁾

		乳児における心理発生的疾病 病原論的分類	
心 毒 素 的 疾 病	母親の態度 一次的無保護>受動的 子供を拒否する> (非受容)>能動的	乳児の疾病 新生児の昏睡 (Ribble) 嘔吐	
	最初の過保護	3か月痙痛 (Kolik)	
	敵対心からくる過保護	乳児の喘息性疹 (Atopische Dermatitis)	
	寛容と敵対間の動揺	運動性過敏 (前後に動く)	
	循環的な気分の推移	食糞症 (Koprophagie)	
	意識的に補正された敵対	攻撃的発揚性質 Aggressiver Hyperthymiker (Bowlby)	
脱 落 一 疾 病	情動供給の部分的奪取	アナクリティック抑うつ症 Anaklitische Depression	
	情動供給の全部的奪取	消耗症 Marasmus	

の発信であるがV, Aゾーンへと変化しても可能となる。発達するにつれて、自らの手や足でその接触の維持確保の為に、よりはっきりと手だてを用いるということである。T信号行動系発信は当然のこと乍ら、両者の距離がゼロmでないとは機能しないということ指摘しておきたい。

遅滞児らは、手や足の操作が自由にできて向かうということがない⁹⁾。相手の人との間に物理的距離がある。両者の関係の客観化として接近過程の類型(図V, p. 61)で把握する。交信過程の学習がなされていない子どもにとっては、距離が遠い程、発信及び受信は困難になる。そこに居ることが子どもにとっては交信遮断に近い意味をもっているということをおさえておかななくてはならない。しかし、本人に内的変化が起こり、発信のうち、とりわけ相手を受信したいと思えたときに、接近する。Mちゃんの事例(表Ⅲ, p. 62)にみるように、接近の移動と、向きの変化過程がわかる。

向かう力がない子どもたちには、「向くこと」、「向かうこと」を誘導する方法としてのTinbergenの接近誘導法^{41)~42)}で、本人がやってくるまで待つことがある。V信号行動発信で相手の子どもの受信態勢の変化を細かくチェックしながらの交信の為、なかなか大変である。

「人」についてわかってもらうという意図で、たとえ生傷が絶えることがなくても⁹⁾、接触法や抱きしめ法⁴²⁾をとることもある。しかし、遠方定置型の子どもに接触法をとるにはかなりの覚悟がいる。子どもからの回避反応としての、たたく、ける、噛むなどの力と量に感覚的に耐えられるかどうかということと関係するからである。むしろ、子どもの行為をVゾーン内で見守ることであろう。そして、危険時には緊急目的的接近³²⁾⁴³⁾とし、体当りで子どもの身を守ることであろう。Tinbergenの方法⁴¹⁾は本人自身が向きや方向を縮めるまでに時間を要する。両者の相対関係の結果の変化の行動であるが、Mちゃんのように

に長期間要する子どもから、5～15分間で接触を持ってくる子どもまでの幅がある。接触をもったとしてもその時から細やかな対応をして、徐々に、を心がけなくてはならない。決して急がないことである。交信において受信者としての役割があることに気づいてもらう過程となり、同時に人は発信者としての機能も併せもっている、ということに気づいてもらう過程でもある。抱きしめ法⁴²⁾は、行為者が隠やかに包みこむ態勢が求められる。行為者の感覚等がじかに伝わる為である。

乳児らの場合は、T信号行動系発信において、接触時間量をふやし、その交信の結果としてもたらされる促進型をめざすことにある。保育園乳児から得た人間関係の様相の推移(表V)⁴⁸⁾で、その内容をみることができる。回避型、不定型、促進型に推移し、その経過において「向かう」さまが顕著に見出せる。保育者としての間柄も、その内容とともに質的に転換している。ひとりの子どもと保育者との人間関係の段階を示すもので、Cちゃんとは安定期までを得た。交信過程のたまものであるが、両者の間柄の濃淡を決めるのは子どもの側にあるということを示唆している。これらは、いずれも、Tゾーン保育をできるだけとろうとすすめたことにある。とりわけ成長発達の未熟な乳児においては、日常の保育活動(生活面の介助を含む)で交信の手がかりが得られただけでなく、その機能の習得につながったということは意義深い。

遅滞児らにみる接近行動は、交信過程における1)向きの変化であり、2)向かうということである。本人自身の向きの変動のあったことを行動(V)で示してくると言えよう。接近行動はその位置によって受信量や質が変化する。近くなるほどに信号行動系の総体を、その人自身として受けとめることにある。近くなることは同時に相手にも交信における情報量を与えることになり、自分をより知ってもらう機会となる。交信をくり返すということは、相手の発信によって、またその発信のタイミングなどによっても受信した自らの発信内容を変動させることにもなる。交信過程では従って、相手との関係の中で変動的な連続的交信であることを学習することになる。人間関係で発達の様相の視点として「向き」をおさえることの重要性を改めて指摘しておきたい。

一方、自分が発信しているのに受容してもらえなかったととらえた場合には、受信者に対して敵対心(hostility)⁴⁹⁾さえ抱くこともある。さらに発信者側の失敗感が重なると、発信することさえも停止する。両者の間柄は切断、終結する。

両者の間柄が展開するには、一方のみではなく、その両者において「条件」が求められ、常に相手の状態をみはからいながら交信をもつことにある。

今後の課題

交信過程における展開過程を質としておさえて抽出し、その内容を吟味することと切断や停止などの内容を吟味することで、人間関係展開論の検討にある。また、人間の発達の基盤としての人間関係の発達を促進するかかわり方としての、発達助成論を、保育者養成の視点から論じることにある。

表V H組の子どものたちの人間関係の様相の推移 (梅田 1989)⁴⁸⁾

子ども	4月	7月	10月	1月	3月
A	抱っこでのおさまりが悪い。	抱っこでおさまる。表情、しくさ、声で抱っこを誘導。	さすとおさまる。	表情で抱っこを誘導。 月に寄りかかる	接近、接触する。 正面から抱きつく。
B	抱っこでのおさまりが悪い。	近距離で抱きつく。 抱っこでおさまる。	後追い。	近距離で接近、抱っこに触れる、叫ぶ。	近距離で抱くと抱っこに接近。 さすとおさまる。
C	抱っこをすそとそっくり返る。 オムツでのおさまりが悪い。	近距離で抱きつく。 接近行動。	抱っこでおさまる。 抱っこからおさうとすとしがみつく。	抱っこと表情でのやりとりをする。	抱っこの仕草をそっくり返る。 抱っこを視線だけで誘導。
D	体を軽くたたくたかたかたもおさまらない。	抱っこの維持要求。	抱っこでおさまる。 抱っこからおさうとすとしがみつく。	近距離で接近する。	抱っこから抱っこの後に抱っこからの維持要求。
E	抱っこでおさまる。	抱くとおさまる。 しがみつく。	さすとおさまる。	後がより抱きつくとびつ。	抱っこの手さしをさす。 抱っこの手さしをさす。
F	抱っこの維持要求。	さわる、抱くとおさまる。	抱っこでおさまる。 抱くと抱っこに寄りかかる。	接近してくっついてくる。	人見知りのため抱っこに接近。 人がいると抱っこにしがみついている。
G	おんぶでおさまる。	5月退所			
H	7月入所	抱くとおさまる。 抱くと抱っこに寄りかかる。	接近し、抱っこに両手をさしのべる。指をさし、そのことについて抱っこをやりとりをする。	後追いつく。 後追いつくこともある。	接近し、抱っこに両手をさしのべる。
I			1月入所	抱くとおさまる。	抱っこの要求を声、表情、しくさで表す。
J				2月入所	近距離で接近し、抱っこにすりよっつかまっている。

子どものタイプ

- 発達型
- 不定型
- 回避型

人間関係成立段階

- I 模索期
- II 接触体験期
- III 共有体験期
- IV 介別不安期
- V 安定期

- ◎ : 保育者
- : 子ども
- ⊕ : 目的接近

参 考 文 献

1. 浅野千鶴子編 (1985), 擬音語・擬態語辞典, 角川書店
2. Angle, M. (1975), *Bodily communication*. London, Methuen
3. J.アラン, 阿部秀雄監訳 (1984), 情緒障害と抱っこ法, 赤ちゃんから自閉症児まで, 風媒社
4. T.バーニー, 小林 登訳 (1988), 胎児は見ている, 祥伝社
5. J.ボウルビイ, 黒田実郎訳 (1975), 母子関係 I 愛着行動, 岩崎学術出版社
6. ブラゼルトン, 新井清一郎訳 (1984), ブラゼルトンの新生児行動評価法, 医歯薬出版
7. グレンド・ドーマン, 人間能力開発研究所訳 (1987), 知能はかぎりなく, サイマル出版
8. 福井康之 (1986), まなざしの心理学——視線と人間関係——, 創元社
9. 飯高京子, 若葉陽子, 長崎勤編 (1987), 構音障害の診断と指導, 講座言語障害児の診断と指導 第一巻, 学苑社
10. Blurton Jones, 岡部恒也他訳 (1986), 乳幼児のヒューマンエソロジー, ——発達心理学の新しいアプローチ——, プレイン出版
11. W.ジョンソン, 田口恒夫訳 (1987), 教室の言語障害児, 日本文化科学社
12. M. H. Klaus, & J.H.Klaus 竹内徹他訳 (1984), 母と子のきづな, 母子関係の原点を探る, 医学書院
13. 木村もち子 (1998), マタニティーブルー, サイマル出版
14. フランク・キャプラン, 大久保雄二郎監訳 (1986), 0歳児の発達, 同朋舎
15. フランク・キャプラン, テレサ・キャプラン, 川端利彦, 大野秀樹監訳 (1986), 1歳児の発達, 同朋舎
16. 前川喜平 (1979), 乳児健診の神経学的チェック法, 南山堂
17. D.モリス, 石川弘義訳 (1984), ふれあい, 愛のコミュニケーション, 平凡社
18. 村田 拓 (1981), 荒れすさぶ野にたつ子ら, 現代社会文化研究所
19. 成瀬武史 (1989), 意味の文脈——通じる世界の言葉と心——, 研究社出版
20. 小川捷之 (1970), 母子関係の喪失と障害, 現代のエスプリ 母親, 母性の氾濫と喪失, No.115, pp.103-106
21. 小川捷之 (1970), 日本における母親, 現代のエスプリ 母親, 母性の氾濫と喪失, No.115, pp.182-186
22. 大野 晋, 浜西正人 (1981), 類語新辞典, 角川書店
23. ポテージ発達診断カード (1989), 主婦の友社
24. Saitz R. L. & Cervenka E. J. (1972), Hand book of *gestures*: Columbia and the United States. In T.A.Se book(ed), *Approach to Semiotics*. The Hague: Mouton.
25. 坂本一郎 (1980), 読みの構造, コミュニケーションの典型 第6章, pp.98-125
26. J.サンガー, 竹内 均訳 (1989), 乳児は何でも知っている, 祥伝社
27. 佐々加代子 (1983), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究 I 言語発達に関するメカニズムの基礎理論の検討, 白梅学園短期大学紀要第19号, pp.41-68
28. 佐々加代子 (1984), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究 II 言語発達の基礎的要因の検討, 白梅学園短期大学紀要第20号, pp.53-71
29. 佐々加代子 (1985), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究 III 言語発達における母子関係の発達段階と信号系の検討, 白梅学園短期大学紀要第21号, pp.29-45
30. 佐々加代子, 堤由起子 (1985), 保育におけるコミュニケーション関係の成立 I, II, 日本保育学会第38回大会発表論文集, pp.438-441
31. 佐々加代子 (1986), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究 IV 母子関係における信号系と言語発達の関連, 白梅学園短期大学紀要第22号, pp.55-69
32. 佐々加代子 (1987), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究 V 言語発達と社会化の関連, 白梅学園短期大学紀要第23号, pp.73-84
33. 佐々加代子 (1988), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究 VI コミュニケーション関係における阻害要因の検討, 白梅学園短期大学紀要第24号, pp.47-61
34. 佐々加代子, 梅田裕子, 堤由起子, 中村晃子 (1989), 保育における人間関係の展開——子どもとのかかわり——, 白梅学園短期大学紀要第25号, pp.27-34
35. 佐々加代子 (1989), 保育者養成における言語教育 VII, ——質的転換をめざして——, 全

- 国保母養成協議会第28回研究大会論文集, pp.61—62
36. 佐々ゼミ (1988), コミュニケーション過程における「受信」についての検討, 昭和62年度白梅学園短期大学保育科2年ゼミ発表資料集, pp.25—28
 37. 佐藤方哉 (1987), ダウン症児の家庭療育, ぶどう社
 38. 瀬谷入男 (1980), 対人関係の心理, 培風館
 39. J.Spits, 古賀信義訳 (1965), 母子関係のなりたち, 同文書院
 40. 田口恒夫 (1979), 言語障害治療学, 医学書院
 41. Tinbergen E. A. and Tinbergen, 田口恒夫訳 (1975), 自閉症——文明社会への動物行動学的アプローチ, 新書館
 42. Tinbergen, E. A. and Tinbergen, 田口恒夫訳 (1987), 改訂自閉症・治癒への道, 文明社会への動物行動学的アプローチ, 新書館
 43. 堤由起子, 梅田裕子, 佐々加代子 (1986), 保育におけるコミュニケーション関係の成立 III, IV, 日本保育学会第39回大会発表論文集, pp.440-443
 44. 堤由起子, 梅田裕子, 佐々加代子 (1987), 保育におけるコミュニケーション関係の成立 V (1)~(2), 日本保育学会第40回大会発表論文集, pp.106-109
 45. 堤由起子, 梅田裕子, 佐々加代子他 (1988), 保育におけるコミュニケーション関係の成立 VI, VII, 日本保育学会第41回大会発表論文集, pp.90-93
 46. 内山喜久雄他監修, 島田照三他編 (1988), 母性喪失, 同朋舎
 47. 梅田裕子, 中村晃子, 佐々加代子, 堤由起子, 大内千浩, (1989), 0歳児保育における人間関係の展開, 日本保育学会第42回大会発表論文集, pp.586-587
 48. 梅田裕子, 堤由起子 (1989), 保育における人間関係の成立と展開——0歳児保育からの検討——, 第20回保育研究大会発表資料, 東京都公立保育園研究会, pp.177-192
 49. C. Van Riper, 田口恒夫訳 (1980), ことばの治療, 新書館

なお、この研究の一部は1988年度白梅学園短期大学研究助成金によるものである。ここに感謝申し上げます。

さっさ かよこ (児童学)
うめだ ゆうこ (保育学)
なかむら あきこ (保育学)